

## 論文審査の要旨

筆頭著者（学位申請者）氏名

楢淵 滯

主論文の題目  
および  
掲載・審査委員

題目 Limits of Subsidized Medical Care in Reducing the Effect of Socioeconomic Disparities: Liver Cirrhosis Mortality in Japan  
(本邦におけるアルコール性肝硬変の死亡率から鑑みた社会経済因子による健康格差低減の限界)

掲載誌 Journal of St. Marianna University 2023; 14:1-12.

主査 立石 敬介  
副査 橋口 さおり  
副査 高橋 秀明

[論文の要旨・価値] <背景>アルコール性肝障害は世界における死亡数が毎年 300 万人とされ、いまだ増加傾向にある。アルコール依存症は社会経済的地位の格差に由来する死亡の 10%以上を占めるといわれているが、生活保護制度が導入されている本邦では所得水準による医療への影響は比較的少ないと考えられるが、その点についてアルコール肝障害での検討は少ない。そこで本研究では生保の有無でアルコール性肝障害の予後に影響するかを検討した。<方法>244 名のアルコール性肝硬変患者を生保受給の有無で二群に分け、後方視的コホート研究を行った。主要評価項目は全原因死亡とした。<結果>対象は年齢中央値が 61.5 歳でその 26.1%が受給者であり、追跡期間の中央値は 819 日であった。肝障害の進行度に差はなく、生保群では独居とキーパーソン(KP)の不在が有意に多かった。結果的に 9100 人月の追跡で 33.6%が死亡したが、生保/非生保で 48.4%/31.9%と有意な差を認めた。副次評価項目に差を認めなかった。コックス比例ハザードモデルにおいて、年齢・C 型肝炎・肝障害重症度、KP 不在で調整しても傾向は変わらず、生保受給による死亡ハザード比は 1.781 と生保群で有意に高い死亡リスクが示された。死亡原因も両者の傾向に差があり、肝性脳症や発見時死亡の割合が生保群で多い傾向にあった。<考察>生保群のアルコール性肝障害で有意に高い死亡ハザード比を示し、医療の無償化だけでは社会経済的に辺縁化された集団の健康格差低減に十分ではないことが示唆された。独居や KP 不在による周囲からの支援の希薄性が、断酒機会などの低下にも関与する可能性が考えられ、自助会や地域の社会的支援体制を構築することで死亡率を改善できる可能性を考察した。総じて新たな視点からのアルコール性肝障害の予後についての検討で、独創性を有する研究であった。

[審査概要] 審査では、今回の結果がアルコールに特異的か、具体的に社会がどう関わるべきか、前向き研究として発展させるとしたらどのようにデザインするか、などの点について質問がなされた。発表者はいずれの質問にも自らの意見を述べ答えることができた。

## 最終試験結果の要旨

[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価]

本研究を発表者が主体的に行っており研究能力が十分であることが確認された。研究結果に対する考察力についても質疑応答での十分な説明からも確認された。英語読解力は指定された英文文献の一部を和訳することにより評価され、十分な読解力があると判断された。